

いふわね(一)

生活いふわねの知恵

年 組 氏名

「ことわざ」には、昔の人の知恵がいっぱいつまっています。その中から、まず、天候や気象に関するものを紹介してみることしましょう。

次に、毎日の天気をうらなううえで参考となる「ことわざ」をあげてみます。
同じ「夕焼け」でも季節によって違いがあります。

暑さ寒さも彼岸(ひがん)まで

夏の暑さが残っているといっても秋の彼岸のころまでで、そのころを過ぎると涼しくなって過ごしやすくなるし、冬の寒さが残っているといっても春の彼岸のころを過ぎると暖かくなって過ごしやすくなるものだという意味。
いずれにしても、彼岸が季節の変わり目で、そのころを過ぎると気候がちやうど過ごしやすくなってくるということ。

冬至(とうじ)から畳の目ほど日が延びる

『冬至から畳の目一つだけ日が長くなる』

冬至とは、一年で昼間の長さがもっとも短い日のこと。ふつう、十二月二二、三日のころ。
冬至を過ぎると、少しずつ、少しずつ日が長くなるとのこと。

※「三寒四温」というように、冬から春にかけての季節のうつろいは、寒い日が三日続くと暖かい日が四日続く、というふうに寒い日と暖かい日とがかわるがわるやってきて、やっと春になるといふ。

秋の日は釣瓶(つるべ)落とし

釣瓶は、井戸の水をくみ上げるために、縄やさおを付けたおけ。釣瓶落として、急速に落ちることをいふ。

秋の日は、水をくむときの釣瓶が落ちるように急速に暮れるということ。

春の晩飯あと三里

春は日が長いので、夕食を終えてからでも、暗くなる前にまだ三里くらい歩くことができるということ。

知っておきたいことわざ集1

○案ずるより産むが易(やす)い

(物事は、はじめ心配するよりも実行してみると案外たやすくできるものだというたとえ。)

○石のうえにも三年

(いくらつらく苦しくても、しんぼうすればきっと報われるものだという教え。)

○氏(うじ)より育ち

(人間にとって大切なのは、その人の血筋や家柄ではなく、育った環境やその人自身の努力だということ教え。)

秋の夕焼けに鎌(かま)を研(と)げ、夏の夕焼けに川を渡れ

秋の夕焼けは翌日がいい天気になる印だから、農作業をするための準備をしろ、夏の夕焼けは次の日が雨となるから、早く川を渡ってしまえ、ということ。

※似たような例では、こんなものもあります。

○春の夕焼けは蓑(みの)と笠(かさ)

(翌日が雨になるから、雨具の準備をしたほうがよい。)

○夏の夕焼け雨が降る

○夏の夕焼け田の水落とせ

(大雨になるおそれがあるから、田の水があふれないように気をつけておく必要がある。)

その日の天気を知るうえで、朝の状態が大きな意味をもつようです。

冬の霞(かすみ)はこうすき持つてこい

「こうすき」は、雪かき用の道具。朝の霞がはれるとふつうはよい天気になるのだが、冬にはかえって大雪になることがあるから雪かきの道具を準備したほうがよいということ。

朝焼けは雨、夕焼けは晴れ

朝、東の空が赤く染まっているのは、その日雨が降る前触れで、夕方、西の空が赤く染まるのは、翌日がいい天気になるしるしだということ。

※「夕焼け」のときと同じように、季節が春だと反対に、

○春の朝焼けは日照り

(ふつう朝焼けは雨の前ぶれだが、春はいい天気になる。)

○情けは人のためならず

(人に情けをかけておけば、いつかは必ず自分のためになるという教え。)

○帯(おび)に短したすきに長し

(何かに使おうにも中途半端で使いものにならないことのたとえ。)

○果報(かほう)は寝て待て

(果報はしあわせ。幸運はあせらずにじっと待っているのがよいという教え。)